「ツアラトウストラ」に於ける神の問題

井 ノ 川 清

外国語教室

(1967月9月8日受理)

The Problem of the God in "Zarathustra"

kiyoshi INOKAWA

Department of Foreign Language

(Recieved September 8, 1967)

With the shoccking word "God is dead" which adorned the preface of "Zarathustra", Nietzsche declared God's death. The two propositions "God is dead" and "The superman should live" are just the two pillars at the beginning and at the end which support the whole work of "Zarathustra". The first problem out of the two propositions "God is dead" and "The superman should live" is: What sort of God does Nietzsche deny? The second problem is: What is the superman which Nietzsche puts up? Through the investigation of the both abovementioned points, the summary of the problem, how Nietzsche behaved himself to God in his "Zarathustra",, will be explained.

1. 問題の所在

「ありうべからざることではないか！かの老いたる聖者は森の中にあって，いまだついに耳にしたことがないのである。——神は死んだ！と。」(S. 279)

ツァラトウストラの序説を飾るこの衝撃的な文句を以って，ニーチェは神の死を宣言した。そして一見したとき多くの主題を単に恣意奔放のままに羅列したかにみえる「ツァラトウストラ」なる作品は，実はこの「神は死んだ」という基本命題を中心として，ニーチェの神に対する思想が一貫して追求されている著作なのである。この作品のポイントは種々雑多な表題にみられるニーチェの色々な価値観念や人生哲学的な意見やにあるのではなく，実にニーチェがその一生をかけて追求した神の問題を，この「ツァラトウストラ」に於て，彼の心の奥底で幾つかに分裂矛盾しつつも断固とした決定的統一像を求めようとして苦斗しつつ遂にはこの斗争に疲れはて，しかも自らはその疲れを明確には意識せず，彼が独自に創造し得たと考える「超人」と「永遠回帰」という二つの概念の中に逃避しゆく没落の姿にこそあるのである。

序説の「神は死んだ」という文句で感動的な響をたてつつ始まる「ツァラトウストラ」は第四部に於て次の言葉で彼の最も宣言したい主張を高く掲げる。

「神が墓に入ってより，はじめてなんじらは復活した。いまぞはじめて大いなる正午はきたる。いまぞはじめて高人は主となる。……いざ，いざ，なんじら高人よ！いまぞはじめて人類の未来の山は陳痛する。神は死んだ。いまぞわれらは願う——超人の生きんことを。」(S. 522, 523)

「神は死んだ」そして「超人が生きなければならない」というこの二つの命題こそが「ツァラトウストラ」全篇を支える初めと終りの二本の柱である。そして少くとも主観的にはニーチェはこの二つの命題の絶叫をもって満足したのである。だが実際は彼は不安のただ中から満足と安心の場を一挙に求めようとしたにすぎない。「ツァラトウストラ」全篇はしばしば思われているように決して景気のよい上っ調子の誇大妄想的なうぬぼれで満ち満ちているのでもなければ，またニーチェが主観的に思っていたように，晴れやかな正午の明るさと清々しさとを響かせているのでもない。「神は死んだ」という一読して恐るべき自信と勝利感とを感じさせるような文句の出発点からして，既に実際は神に背いてさまよい歩く人間の不安と寂寥と孤独の影の余韻を全篇胸ふさぐようにみなぎらせているのである。ニーチェ自身がいかに

懸命にその影を否定し得たと信じていたにせよ。

「神は死んだ」そして「超人が生きなければならない」というこの二つの命題から先ず問題となるのは，一体ニーチェが否定を宣言する神とはいかなる神なのか？それは神そのものなのか？　神のすべてなのか？　それとも人間が神だと錯覚していた誤てる神の偶像なのか？或はニーチェが彼なりに思いこんでいた神の実体なのか？　ということである。この点に関してはニーチェ自身明確に論理的に把握してはいなかった故に，しばしば彼の使用する神の概念は多義的に混同しているのである。しかし，この表面的な混同と錯綜の中から，神に対するニーチェの本質関係を浮き彫りにすることが第一の肝要事である。特に従来ニーチェは「神は死んだ」の言葉を発したものとして，単純に神の全面的否定者として一般的に取り扱われすぎたきらいがある。しかし，ニーチェの神に対する関係がそんなに簡単なものではないということは「80年代の遺稿」（権力への意志）を検討することによって一層明らかとなるが，この「ツァラトウストラ」だけの検討によっても十分に明らかになることである。

次に問題となるのは，彼が唱導する「超人」とは一体何なのか？　超人とは神無き後の神の代償物なのであり，それはニーチェの価値観に於ては神に全く対置し得るものなのか？或はそれ以上のものなのであろうか？即ち古き価値観の最高のものとしての神を克服した新しき観値観の最高のものが超人であるという彼の主張は真に神を克服し得た主張であると客観的論理的に見做されることができるのだろうか？　ということである。更に，彼は「超人」を人類に提起することによって人類を高めたのか？　低めたのか？　要するに人類にとって「超人」とはいかなる意義を有するものであるのか？ということである。

以上の二点を掘り下げ究明することによって，ニーチェは「ツァラトウストラ」に於て結局は神に対してどのようであったのかという問題の総括が明らかにされるであろう。

2.　ニーチェの否定する神の実体

ニーチェの否定する神の実体がどのようなものであったのかを知るためには，ニーチェの幾つかの決定的な言説を抽出しつつ，それを分析してみることが必要である。先ず最初にニーチェが「神は死んだ」と宣言しなければならないのだと思いこむに至ったその理由を考えてみよう。一体，何故ニーチェはそう宣言しなければならないと思ったのか。ニーチェは云う。

「ここに彼は彼を最後に支配せし者を探す。このもの，即ち彼の最後の神に対して敵となって，巨いなる龍と勝利を争って相搏つ。かく精神がもはや支配者と呼び神と呼ぶことを肯ぜざる巨いなる龍とは何であるか？この巨いなる龍は『なんじ当になすべし』と呼ばれる。さあれ，獅子の精神はいう。『われはなさんと欲す』と。

『すでに一切の価値は造られた。しかして一切の既成の価値は即ちわれである。まことに『われ欲す』はもはや存在するを許されぬ！』かくこの龍はいう」（S. 293, 294）

この引用から明らかなように，ニーチェは神を人間に対する支配者，「なんじ当になすべし」の命令者と考えている。彼は神と人間の関係を丁度地上の君主——家臣という封建的関係を反映するようなものとして理解する。そのように理解する以上，神は人間の「我れ欲す」を抑圧するものと見做されるのは当然のことである。従って封建的諸関係から解放されるのと同じように，人間は神から解放されなければならないと考える。ニーチェが断固として神を否定する時のその神はこのように実際は，現実のヨーロッパのキリスト教の教会信仰なのであり，従って世俗の権力機構と結びついたローマ法王を頂点とする多くの司教司祭牧師たちと病弱の信徒たちとの関係が神と人間との関係というように転化されているのである。

ニーチェは神のにない手とその信徒たちに対する軽蔑と否定をそのまま神そのものに向け，それをもって「神は死んだ」と宣言する。だが実際はこのことは人間がもはや正しき真の神を見失ってしまったという世界史的現象にニーチェ自身までもが幻惑されてしまったということに他ならない。事実歴史的キリスト教の教会信仰の歴史は一貫して，神の真の姿を知らしむるものではなく，ただ人間を犯罪者扱いにしてきた歴史であった。ニーチェは教会信仰について次のように云う。

「おお，これらの祭司たちが打ち建てた，小さき屋をみよ！　その甘たるい匂いに充ちた洞穴を——かれらは教会と呼ぶ！

おおこのまやかしの光よ，この黴臭い空気よ！　霊魂がその高みへと飛翔するを許されざるこの場所よ！

霊魂は飛翔せずして，かれらの信仰が命ずる。——『膝を突いて階段を昇れ，なんじら罪人たちよ！』と。」（S. 349）

ニーチェはこのように，神を歪曲して把握し，それを誤って民衆に伝達し，或は利用する多くの神のにない手たちを攻げきすると共に，更には神を受けいれる信徒の側をも攻撃する。彼ら信徒たちは何故地上の封建的君主に対応するような支配者としての神を求めたのであろうか？　ニーチェはかくいう。

「一躍もて，死の一躍もて，最終に達せんと欲する疲労，またもはや意欲することを意欲せざるあわれむべき無智の疲労，——之がすべての神々を造り，背世界を造ったのである。

かの仮作し，神に憧憬する者の中には，多くの病弱の

徒がいる。」(S. 298, 299)

もし神がもはや意欲することも，自らに命令することも，創造することもなし得ない病弱の徒が，ただ救いを求めてすがらんとして造ったものに過ぎないものであるなら，その神をニーチェが忌み嫌うのは当然である。従ってニーチェは絶叫する。

「ああなんじらわが同胞よ，まことはわが造りしかかる神は，一切の神々と等しく，人間の作為であり，狂想であったのだ！

この神は人間であったのだ。しかも人間と自我との貧弱な一部分であったのだ。わが灰とわが炎の中より，この神は——この幽霊は現われたのである！」(S. 297)

自らの弱さの故に夢中で救いの綱を神に求めた自己の姿に対する自己嫌悪から，神そのものまでも抹殺してしまおうとするのは卑怯な責任転換ではないか。しかもニーチェは極めて彼らしくない考え方で神を信ずることは出来ない理由を次のようにいう。

「かれらの救い主をわれに信ぜしめんがためには，かれらはよりよき歌をうたうべきだ。この救い主の使徒たちは，より多く救われたる者の風貌を具うべきではないか！」(S. 350)

罪の意識におののき，少しも救われた風貌を持たない使徒たちをみて，神を否定するということは実に非論理的な態度ではないか。ベートーベンのシンフォニーに感動できない聴衆者がいるからといって，ベートーベンの価値を否定することはナンセンスであろうし，真理を把握し得ない人間がいるからといって真理を否定しさろうということも馬鹿げているだろう。だがニーチェはしばしばこのような錯覚を正しいと確信し，自らを神の否定者として思い上る。

このようにニーチェの神の否定の第一の論拠は歴史的現実としてのキリスト教と教会信仰の堕落である。彼はそれを目の当りにみて激しい嫌悪感を覚え，それらを否定する立場に自らを置くのであるが，その時軽率にも全く非理性的にそれの否定を神そのものの否定にまでもっていってしまった。この態度が神を論理的に否定したことにならないことは明らかである。

では彼は直接的に神を否定する論拠を全然述べていないかというとそうではない。次に彼が幾らかでも論理的に神の存在を否定しようとした言説を引用して検討してみよう。

「神は一つの臆測である。われは要求する。なんじらの臆測が思考しえらるるものの範囲に止まることを。」(S. 344)

この言句はニーチェの神を否定する論拠となる言説の中では最も論理的なものである。だがこの言説は，神を確信し感知し得る人間がその存在を論理的に証明し得ないことに対する反論とはなり得ても，神を否定する論理とはなり得ない。この言説によって明らかなことは，神の存在を論理的に証明することもできないが，それを否定することもできないという哲学史上の問題をニーチェが読者に再確認させたということに他ならない。真理は万人が容易に到達し把握できるものではない。だが真理は存在する。しかも万人に向って開かれている。原子エネルギーは二千年前に於ても存在可能であった。だが人間がそれを知らなかっただけである。その真理は原子爆弾と原子力発電という実用的事物となって現われて初めて万人が感じるようになる。だがその時ですらしばしば彼らはそれが真理の現象化の一型態であるということまでは認識しえないことが多い。

ニーチェは更に次のように思い上った言を吐く。

「もし，神々が存在するとせば，われいかに自ら神にならざるに堪ええようぞ！ この故にこそ，いかなる神々も存在しない。」(S. 344)

ニーチェが神々になる気がないからといって，また神になっていないからといって神が存在しないということになると思うことは全くの精神錯乱である。この精神錯乱は彼が論理的に語ったと信じている次の言に於ても現われている。

「(もし神が存在するとするならば) 時間は存在しない訳ではないか。そうして一切の過ぎゆくものは虚妄である筈ではないか？」(S. 344)

このようにいうことによっては，過ぎゆくものは神に向って歩んでいるのであり，そこに於てのみ価値があるのであるとする信念を少しも否定することにはならないのである。

「もし神々が既に存在せりとせば，いまはた創造すべき何物があろうぞ！」(S. 345)

この言に於けるニーチェの錯覚は，彼は理念と目標とが存在するということは歴史の終りでなく出発点なのであるということを理解していないということにあるのである。

更に次のように，ニーチェをして神を否定する立場に追いやった動機の一つには彼のキリストに対する複雑な感情がつけ加わっている。ニーチェはいう。

「『神は唯一である！ なんじ，われを他にしていかなる神を持つべからず！』——この言葉は，——人の神によって云われた，もっとも神を無みする言葉であった。——之が発せられたときに，古き神々は笑い死んだ。」(S. 431)

ニーチェによれば，キリストは他のすべての神々を否定し，自ら一人だけが神であると主張したが故に排斥されねばならない。だがこのことが真であると仮定しても，それは排他的な一神教を主張するキリスト教に対する攻げきにはなり得ても，決して神の否定にはなり得ない。キリストが神の一つの現われであって，その啓示は人類に神々へと向うに至らしめる神の一つの啓示であったという考えを否定するものではない。従ってこの言説

の直後にニーチェ自身による極めて注目すべき，しかも彼の存在の奥底からほとばしり出る神の肯定の言葉が続くのである。

「さればこの時，すべての神々は哄笑し，その座の上にゆれて，叫んだ。——神々はあり。さあれ，唯一の神あるなし。——之ぞまさに神性ではないか？」(S. 431)

人間は誰一人神を否定することはできなかった。ニーチェ自身。人間は神を否定し得たのではなく，ただ人間の方が神々から遠ざかり去っていったにすぎない。このことをニーチェ自身遂に第四部に於て認めざるを得ないようになる。

「なんじは神の殺害者である。極醜の人間よ！……すべてを見——人間をも見たる神は，死なざるをえなかった。かくの如き目撃者が生きてあることに人間は堪ええないのである。」(S. 502, 504)

3. ニーチェの否定し得ざる神の暗示

「ツァラトウストラ」全篇は少くともニーチェの意図にあっては，彼の神に対する否定の態度と神に代るものとしての「超人」と「永遠回帰」の主張に終始している筈であった。そして確にこの筋道は一応貫徹しているのである。だがその表面的な論理の一貫性の背後を探ってみるならば，ニーチェのこの一貫性は決して彼の内奥の確信からの強い信念の発露ではなく，むしろ彼がこの立場をとにかく一貫して守るために払った精神的葛藤の苦しさをこそ表わしているのだということが分るのである。

ニーチェは一方で懸命に神を否定しながらも，他方ではその合い間合い間に神への深い憧憬と思慕と神から去っていった後悔とその後悔に対する命がけの克服とを断片的にもらしているのである。しかもこの断片的表出は終りに進むに従って，深刻な葛藤となってゆく。以下，ニーチェの言説を引用しつつこの展開を跡ずけてみよう。

既に序説の中に次の語句がみられる。

「われは愛する——みずからの神を愛すればこそみずからの神を責むる者を。」(S. 282)

ニーチェの神に対する非難は彼の神への愛の強さの裏返しの表われである。

「われはただ舞い踊ることを知る神のみを信ずるであろう。……いまぞわれは軽快である。いまぞわれは飛翔する。いまぞわれはわれをわが下にみる。いまぞ——われを通じて神は舞う。」(S. 307)

ニーチェは人間を重圧するキリスト教の神を否定する。だが彼の心の奥底には肯定する新しき神が閃く。

「なんじはなんじの炎の中に自らを焚かねばならぬ。なんじまず灰燼となることなくして，いかに鮮しく生れることを望みえようぞ！　孤独なるものよ，なんじは創造者の路を往く。なんじはなんじの七つの悪魔から一つの神を創造せんと願っている。」(S. 327)

ニーチェが古き価値を転倒せんとするのは新らしき神を創造するためなのである。

「女性に対するなんじらの愛と，なんじらに対する女性の愛と。——ああ，之がなお未知にして苦脳しつつある神々への同情であらんことを！」(S. 333)

神の国はただ祈りを捧げて待っていてくるものではない。そこに住むにふさわしい人間の出現とこの人間たちの手によって生み出されるものである。そのために過渡的人間は神々への道を進むべき人間を生みだすべく生きなければならない。男女の愛もこのためにこそあるべきである。

「その甍破れて，崩れた壁のほとりに繁る雑草と，咲く紅い罌粟とに，ふたたび浄き空が燦くとき，——そのときはじめて，われはいま一度わが心をこの神の場所に向けよう。」(S. 349)

ニーチェは神の代弁者であるような顔をしているキリスト教と教会信仰とが崩壊し去ったのち，再び直接神に心を向けようともらしているのである。

「かつてなお楽しかりし日に，わが純潔はかく語った。『万象よ，われにとって神々しくあれよ！』

このときになんじらは汚穢なる幽霊と共にわれを襲った。ああ，いまにしてかの楽しかりし時いずくにか逝きたる。」(S. 368)

ニーチェは幼かりし頃無心に神を信じ神々を讃えていた。しかるに，

「たちまちに，なんじらの「敬虔」はその脂臭き供物を並べ置いた。之によってなんじらの脂の濛気は，わが最も神聖なるものをも窒息せしめた。」(S. 368)

堕落したキリスト教がニーチェから一切の神々を奪い取ってしまったのである。このニーチェの痛恨こそが彼の存在の奥底の叫びなのである。彼の心はもはや神々へと向うにふさわしい純なるものではなくなってしまったのだ。

「われはそもいかにして之に堪ええたことぞ？いかにしてかかる傷を克服しえたことぞ？いかにしてわが魂はかかる墓より蘇って立ち上りしことぞ？……

げにある傷け難きもの，葬りえざるもの，また岩をも爆じしむる力がわが内に潜んでいる。之ぞわが意志である。それ年月の間を，声黙して志渝るることなく，歩みゆく。……健かなれわが意志よ！　ただ墓あるところに復活がある！」(S. 369)

傷ついたニーチェを支えるものそれは実に彼の意志であった。これは後に権力への意志として明確に強調されてくるものである。だがこの意志は果して神々に完全に代わり得る程彼の心に安らぎを与えたものであったろうか。実際には彼はこの時より不断の緊張と不安のただ中へと突入していったのである。ニーチェは絶叫する。

「おおわれは何時わが故郷に帰りうるであろうぞ！」(S. 417)

だが今更どうして神へ向うことができようか。

「偶像に礼拝するよりは，むしろ寒さに歯をふるわせよ！ わが性はかくある。」

われは這いゆく者であるのか？いな——われはいまだかつて権力者の前に這い行ったことがない。」(S. 422, 423)

神を信ずることはキリスト教徒になることだと錯覚しているニーチェは悲壮な決意で神を信じようとはしない。だがこの時このニーチェを取り巻く人々は斗争に疲れ切って再び古き神へと戻ろうとする。新しき神へではない。従ってニーチェは彼らの誘惑と懸命に斗争しなければならない。「ツァウトウストラ」第三部は殆どこの苦斗の連続である。

「なんじの心中には臆病なる悪魔がい，掌を合わせ手を胸に置き，かくて安易に生きんことを冀う。この臆病なる悪魔がなんじに説得する。——『神はあり』と。」(S. 429)

終局近くニーチェはみずからツァラトウストラの影と名のる放浪者に次のように歌わせる。

「われはいま
ヨーロッパ人としてここにあり。
他に為しえず。神よ，助けたまえ！
アーメン！」(S. 544)

勿論ニーチェは主観的にはこの誘惑をも克服し得たと思う。事実彼は古き神へ戻らんとする一切の誘惑をはねのけることはできた。だが彼は結局はどこへ向っていったのか。断片的な心の閃きとして彼は新しい神への道を問う。しかしそれはすぐに「超人」と「永遠回帰」と錯綜し合って遂に最後までニーチェの心に定着するものにはならない。

「この者はついに云ったのである。『かかる神を放逐せよ！ むしろ己れの挙によって運命を作れ！ むしろ痴人たれ！むしろ，みずから神となれ！』と。」(S. 500)

この見解はキリストその人に対するニーチェの極めて好意的なまた正当な見解である。

「まことに，われらは久しく待たねばならぬ。一人の人が来つて再びなんじの神を呼び醒ますまで待たねばならぬ。

そも他なし，古き神はもはや生きていないからである。彼はまったく死に果てたが故である。」(S. 501)

この終局近いニーチェの言説で注目さるべきことは，序説に於て「神は死んだ」と宣言してから前半に於ては常に「神」という語を用いてきた彼が後半に於ては「古き神」という語にみられるように彼が幾つかに神という語を分類して使っているということである。だが彼自身はこの語の明確な概念規定を意識しているわけではない。「古き神」という以上「新しき神」「真なる神」があることを感じている筈である。しかし彼はこの道をこれ以上追求することはしない。彼は一挙に解決を求めようとする。

「われはなお，わが子を生ますべき女を知らぬ。——ただひとり，ここに愛する女がいる。おお，永遠よ，われなんじを愛す！」(S. 475)

彼は結局に於て永遠をとり出してくる。神の時間的一存在様態を。だがこの態度は読者を混乱させるほどの彼の分裂を表わしている。彼は第二部に於て神を論駁して次のようにいっているのである。

「之をわれは悪と呼び，厭人的と呼ぶ，かかる唯一者についての完全者についての，また不動・充足・不滅なる者についての一切の教養をわれはしか呼ぶ！

げにすべての滅び行かざるものは——比喩にすぎぬ！されば時間と生成について至上の比喩が語らるべきだ。この比喩こそは一切の滅びいくものの讃美にしてかつ是認であるべきだ！」(S. 344, 345)

この矛盾こそはまさにニーチェが「ツァラトウストラ」終局に於て結局は彼の前半で述べた神に対する否定の論拠の一つを自ら撤回したことを表わすものである。この正反対の矛盾に気ずかずニーチェは終局に於て次のように飛躍してやっと安心するのである。

「快楽は自己を欲する。永遠と回帰と万有の永遠なる自己同一を欲する。」(S. 556)

「すべての事物は鎖もて連がれ，絲もて結ばれ，愛によって交わっている。

もしなんじらが一度を二度欲したことがあるならば——また，『なんじはわが意に適う。幸福よ，刹那よ，瞬間よ！』と云ったことがあるならば——。さらばなんじらは万有が回帰せんことを欲したのである。

すべての快楽は永遠を欲するが故に！」(S. 557)

そして「ツァラトウストラ」の文字通り最後の頁に於て彼は次のように云わざるを得ない。

「われはいかに幸福を求めようぞ！ われはわが業を求める。」(S. 561)

彼は永遠へとつながる瞬間を求めざるを得なかったし，斗争に疲れ果てた彼は彼の業を求めて宿命の前に膝を屈したのである。

4. 神と超人との関係

「神は死んだ」そして「超人が生きなければならない」という二つの命題が「ツァラトウストラ」の背骨となる思想であることは余りにも明白である。これを文字通り受けとれば，超人は神に代る新しい価値の至高のものであるということになる。たしかにニーチェ自身意識的にはそう考えていた。だが以上に検討してきたように，ニーチェが「神は死んだ」といって否定する神は「キリスト教の神」であることが分った。またニーチェ自身しばしば「真の神」を求める願望の嘆息をもらしていることも分った。とすれば「超人」とは「キリスト教の神」に代るものではあっても「真の神」に代るもので

は決してないということになる。ではニーチェは彼が心の奥底で希求していた「新しき神」のことを「超人」と呼んだのだろうか？「超人」とは本当は「新しき神」のことなのであるが，ニーチェは「神」という言葉を使用するのを嫌って，「超人」とわざわざ人間的な言葉を用いたのであろうか？

この点に関してニーチェは極めてこの関係を明らかにする言説を述べている。

「かしこにあって，一切の生成は，われにとって神々の舞い，また神々の奔放かと思われた。

かしこにあっては，世界は神々の自己よりの永遠の飛翔であり，しかも自己への探索であり，——神々の幸ある自己矛盾であり，また神々が再び自己を聴き，再び自己に属するものであると思われた。

かしこに至らんとして，われは途上に拾った。——「超人」なる言葉を。また人間は克服せらるべき或る物である，という命題を。また人間は橋梁にして目的にあらず——」(S. 444, 445)

この言句で明かなようにニーチェは「超人」を彼が希求する神々への道程の過渡的人間の像として人類に提起したのである。そのために人類が「人間」を克服して「超人」へと向うことを説いた。彼は明確に述べることはしなかったが，この「超人」がまた克服されて「神々」へと向う橋梁なのであるということはニーチェも時々は意識する。だが彼はそれを人類に提起することはやめる。何故か？　ニーチェはいう。

「なんじらは神を創造することをなしえようか？否，すべて神々について喋々するをやめよ！　ただなんじらは超人を創造することはなしえよう。」(S. 344)

ニーチェの目には彼の周囲の人間は余りに小さく病弱の徒であった。彼らに一挙に神々への道を説くことは有害無益ですらある。さし当って前段階としての「超人」を提起したのである。だが，この「猿」——「人間」——「超人」——「神」というシェーマはニーチェ自身に於てすら明確に意識されていた訳ではなかったのであるから，彼の主張する「超人」が多くの読者を迷わせるものであったことは或る程度やむを得ないことであったのである。しかもニーチェは一方で「超人」を人類に提起しつつも彼自身としては「超人」の過渡的位置の緊張に堪えかねて一挙に「永遠回帰」の道へと飛びこんでいってしまったのである。

5. 総括——何を学ぶべきか

結局のところニーチェ「ツァラトウストラ」の積極的意義は何か？　人間はとにかく「猿」から「人間」に進化してきた。だがその人間たちは，ニーチェの目にとっては，キリスト教の神を信じ，既成の価値観と偶像の前に膝まずき，一切の創造意欲を失って，余りに小さくなり果て，ただただ奴隷的幸福を求めていた。もはや未来と上昇がなかった。ここにニーチェの「超人」が登場する。先ず破壊せよ！　古き価値を！　ここまではよい。だが次に。そして創造せよ！　だが一体何を！　ここでーニチェは行き詰りを感じ，深く反省すべきであったのだ。だが，神を自ら捨てて深淵へと突き進んでいったニーチェは自爆を決意していう。善悪の彼岸を超えて創造せよ！　と。まさに世界史はこの予言的命令通りに突き進んだ。ユダヤ人六百万の虐殺。ニーチェはいうかも知れない。それは小さな悪であると。全人類全滅可能の核兵器の出現。ニーチェは云うであろうか？これは小さな悪であると。誇大妄想的といわれているニーチェも現在の事態を予期できない程度にしか，悪の大きさを予見することはできなかった。ここに歴史的社会的状況に埋没してしまった十九世紀思想家ニーチェの限界がある。世界史の現段階に於ける人類は二十一世紀に向けて飛躍的に創造の時代に突入しようとしている。だがそれが存続可能なのは人間が，善悪の彼岸を超えて創造することによってではなく，再び新たなる善を求めて，真理と神々とに向うことによってであるという教訓が，暗き山々から徐々に立ち昇る曙光のように人間たちの間に広ごり始めてきている。マルクスは社会制度の発展を思慮して社会革命を提起した。つまりマルクスにあっては社会経済的存在としての人間存在の疎外現象を問題にし，これを克服するために革命を提起した。即ちマルクスにとっては問題は人間の会社的解放なのであった。ニーチェは更に人間そのものの発展を思慮して人間革命を提起した。「汝なすべし」から「我欲す」への人間の主体性の解放。この点にニーチェ「ツァラトウストラ」の意義と功績はある。だがニーチェがこの幸多き道を完遂し得ないで，その一生を天につば吐くように神々に対する悪口で終始したことは惜しみて余りあることである。たしかに「我欲す」は良い。だが何を欲するのか？　真理をか？狂気をか？　この点に於てニーチェがファシズムと結びついているというようにみられることも或る程度仕方のないことであろう。彼こそは真の宗教改革を行い得た人間であったかも知れないのに。

だが更にこの「ツァラトウストラ」なる書物は我々日本人に，ニーチェを一生縛りつけ発狂させるほどに強大であるヨーロッパに於けるキリスト教の存在と影響の強さをひしひしと感じさせる書物でもある。ヨーロッパ人はキリスト教を媒介としてしか神に向うことはできなかった。従って今日のヨーロッパ人の精神領域に於けるキリスト教の衰微はそのままヨーロッパ人の心の中から神が失われていってしまったことも意味しよう。ニーチェの混迷はやはりそのまま今日のヨーロッパ人の混迷を先駆的に表わしている兆であった。ニーチェ「ツアラトウストラ」はニーチェの死後急速に展開する世界史の悲劇の前奏曲であり，またヨーロッパ人の危機意識の絶叫で

もあったのである。

〔註1〕 引用文のテキストは Friedrich Nietzsche, Werke in drei Bänden, Herausgegeben von Karl Schlechea, Zweiter Band, Also sprach Zarathustra を使用した。引用文末の数字はこのテキストのページ数を示す。

〔註2〕 なお，テキスト引用箇所の訳文は，竹山道雄訳新潮文庫「ツアラトウストラかく語りき」上下巻より原則として使用した。